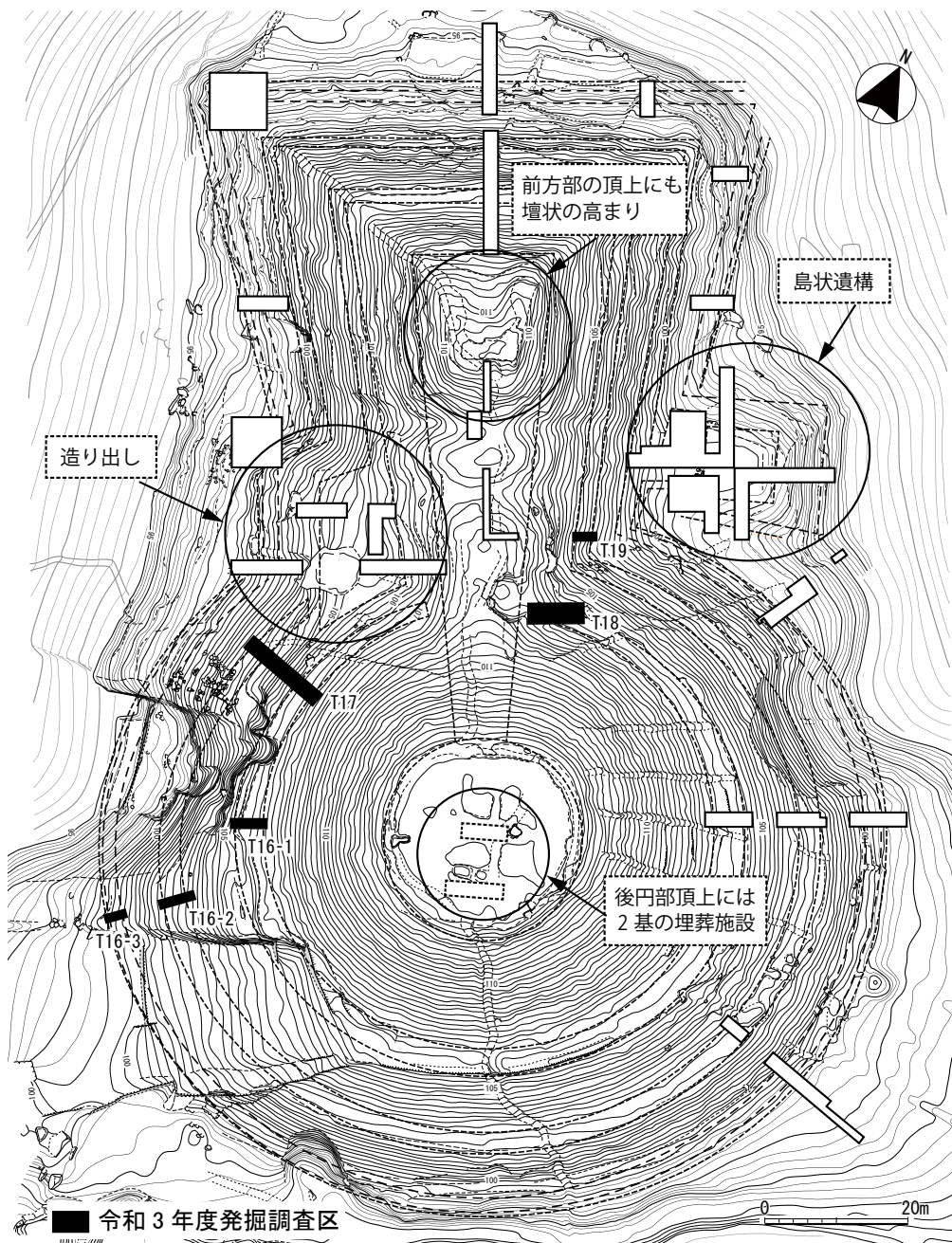


かな くら やま こ ふん
金 蔵 山 古 墳

範囲確認調査（第8次）現場公開資料

古墳の概要

金蔵山古墳は操山丘陵のほぼ中央、標高100mほどの山頂に位置する前方後円墳です。墳長約158mといわれ、四世紀後半から五世紀初頭に造られた古墳と考えられています。造山古墳が築かれる前では中国、四国、九州地方で最大の古墳です。明治期以降数多くの出土品があり、昭和28年には倉敷考古館を中心に発掘調査が行われ、2基の竪穴式石槨やそれらの上部に方形埴輪列をともなう区画がみつかり、多種多様な副葬品や埴輪類が出土しています。現在、古墳全体が山林となっていますが、岡山県を代表する古墳のひとつであり、墳丘の外表施設や埋葬施設などの遺構、副葬品や埴輪などの遺物は学術的・学史的に非常に重要で価値が高く、保存や活用を図っていくことが課題となっています。



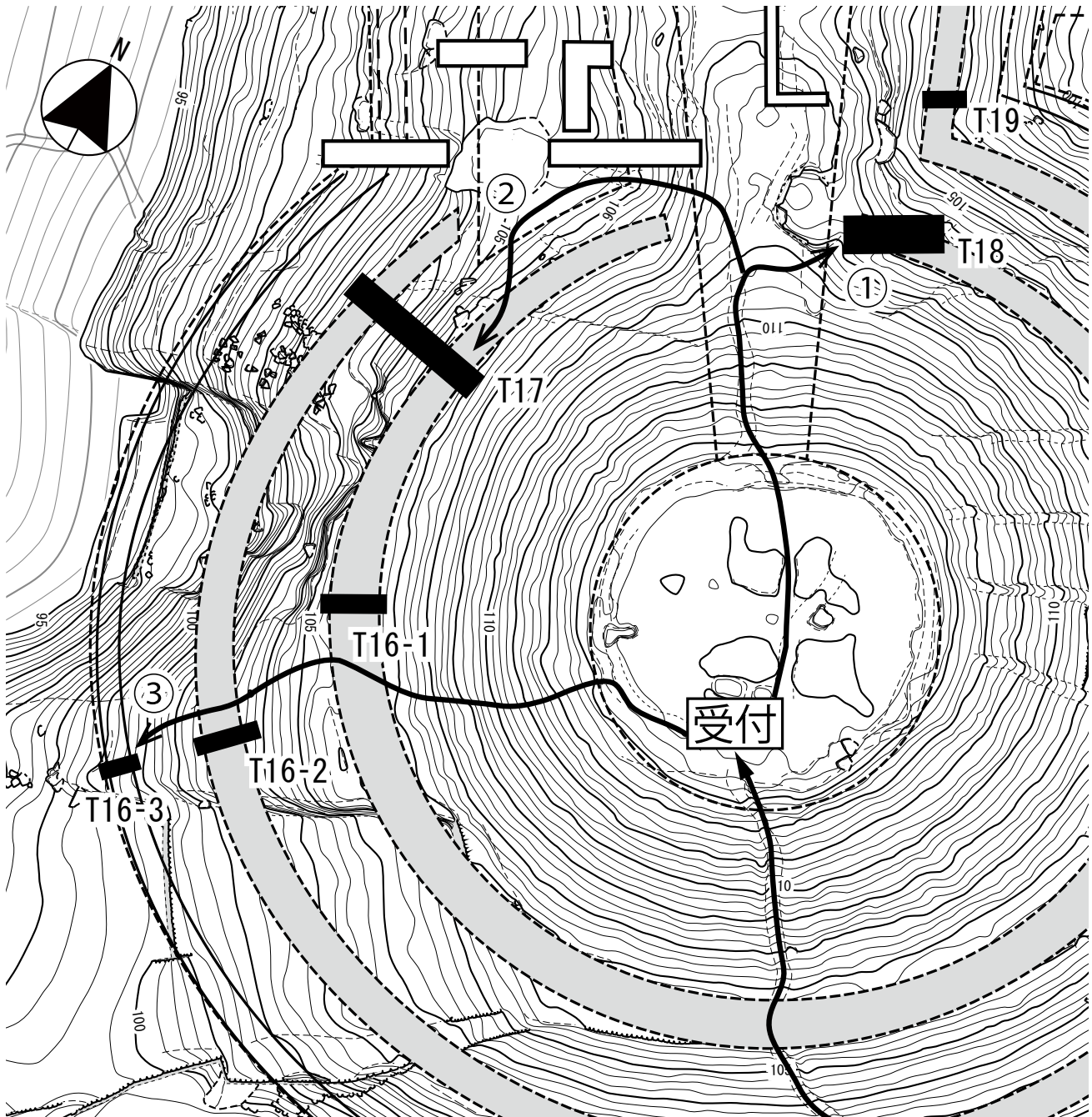
金蔵山古墳の概要と調査区の位置

発掘調査の概要

岡山市教育委員会では古墳の墳丘の規模、形態、構造を追求し、将来的には史跡指定等の保護の措置を図っていく計画で範囲確認調査を実施しています。これまでの調査では、西側のくびれ部に造り出し、前方部の東側に島状遺構が附属することや、くびれ部から前方部にかけての墳端や墳頂の状況の詳細が分かってきました。その際に出土した埴輪は、量や内容ともに充実したものとなっています。

令和3年度調査成果

昨年度に引き続き後円部の調査を行いました。後円部の西側においては、三段に築かれている古墳の端や上下二つある平坦面（テラス）に調査区（トレンチ）を設定しています。また、後円部と前方部につながる「くびれ部」の状況を確認するための調査区が東側です。



調査区の配置と見学ルート

トレンチ 16-1

後円部の第2段テラス上にある調査区です。北側に近接して崩落部、南側は溝状の削平がみられるなど、墳丘の残り具合は周囲を見渡す限り良くありません。掘り進めると第3段斜面の葺石が顔をのぞかせ、その外側に礫が散りばめられています。昨年度の調査において後円部東側で第2段テラスは幅約4mで復元でき、その外寄りに埴輪列がめぐっている状況でしたが、トレンチ16-1内で埴輪は流失してしまっているようです。

トレンチ 16-2

後円部第1段テラス検出を目的としていましたが、葺石等の遺構は確認できませんでした。埴輪の出土もほとんどなく、また転落した石材も数少なく、元の墳丘はかなり失われてしまっていることが分かります。

トレンチ 16-3 [③のルート]

本調査区は過去に埴輪が発見された地点に隣接します。トレンチ内では第1段斜面葺石、円礫堆、埴輪列が出土し、土砂が厚く堆積していたためか残存状況は良好です。埴輪は密な間隔で樹立しており、突帯が3条ある4段の円筒埴輪で、本来の高さは約50cmを測るものとみられます。これら埴輪の設置に際しては、地山を溝状に掘りくぼめた後、埴輪の基底部16cm程度を土で埋めています。また埴輪列より外側においては、旧来の山の地形が続いており、他の裾部の調査区で確認できた盛土や葺石状の列石などの構造は把握しづらいです。

トレンチ 17 [②のルート]

トレンチ16よりも北寄りに設定した調査区です。後円部第1段および第2段テラスを検出しました。まず、第2段テラスでは第3段斜面葺石がみられます。テラスの円礫堆は明確で、埴輪列は欠けている箇所もありますが、4個体が密に並んでいます。埴輪は基底部が残存し、上部の破片等は失われてしまっています。テラス幅はくびれ部側に近づくためか狭くなっています。次に、第1段テラスでは第2段斜面の葺石をみると、大きな岩盤の横に葺石の基底石が縦方向を意識して置かれています。テラス上では円礫堆とさらに外側に埴輪が2個体かろうじて残っている状態です。テラスの幅は約3mを測ります。

これらの2つのテラスは前方部前端側にのびていかず、第1段テラスは造り出しの斜面、第2段テラスは前方部側面の斜面に突き当たり途切れる可能性が高いです。

トレンチ 18 [①のルート]

後円部と前方部のテラスのつながりを調査しました。墳丘の測量調査の段階で、後円部第2段テラスはC字形に完結するものと予想されていましたが、今回の発掘で事実であることが裏付けられました。検出した後円部第3段斜面と前方部側面の葺石は、花崗岩の大きな石材が用いられ、最大のもは長辺が70cm大です。テラスの外寄りには埴輪列が存在し、出土した埴輪は17個体分です。列の最後にくる埴輪は平面形が円形でなく隅丸方形で柵形埴輪の可能性があり、列の終点としての性格をもちます。また、列中には朝顔形埴輪がみられ、円筒埴輪との本数の比率を明らかにすることができます。その他、調査区では後円部および前方部の墳頂から流れ込んだ埴輪が数多く出土しており、大型円筒埴輪、形象埴輪として冢形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪、甲冑形埴輪などの破片がみられました。

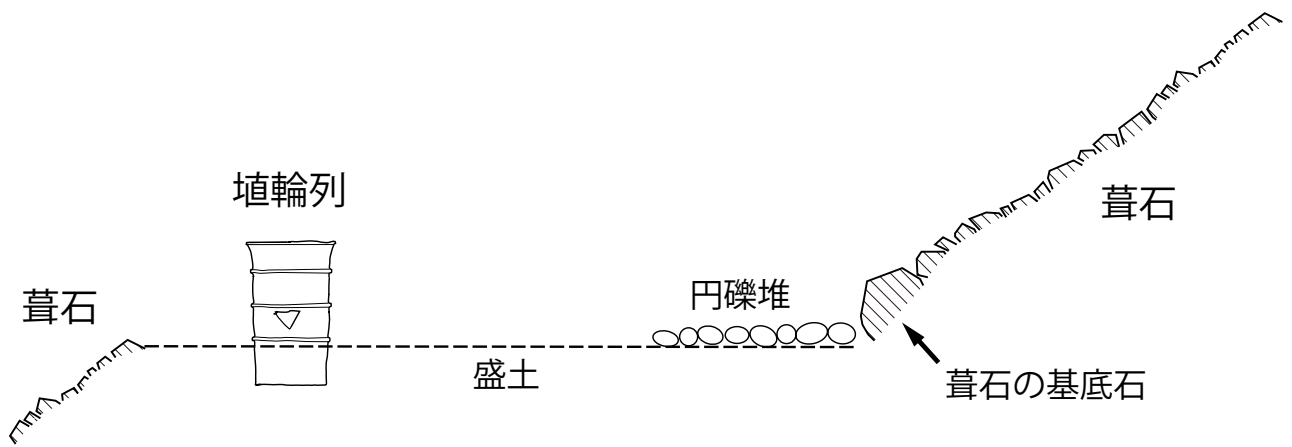
トレンチ18においては、前方部側の葺石がテラスを避けるように構築され、なおかつ埴輪列が前方部側に連続していない点が特筆されます。

トレンチ 19

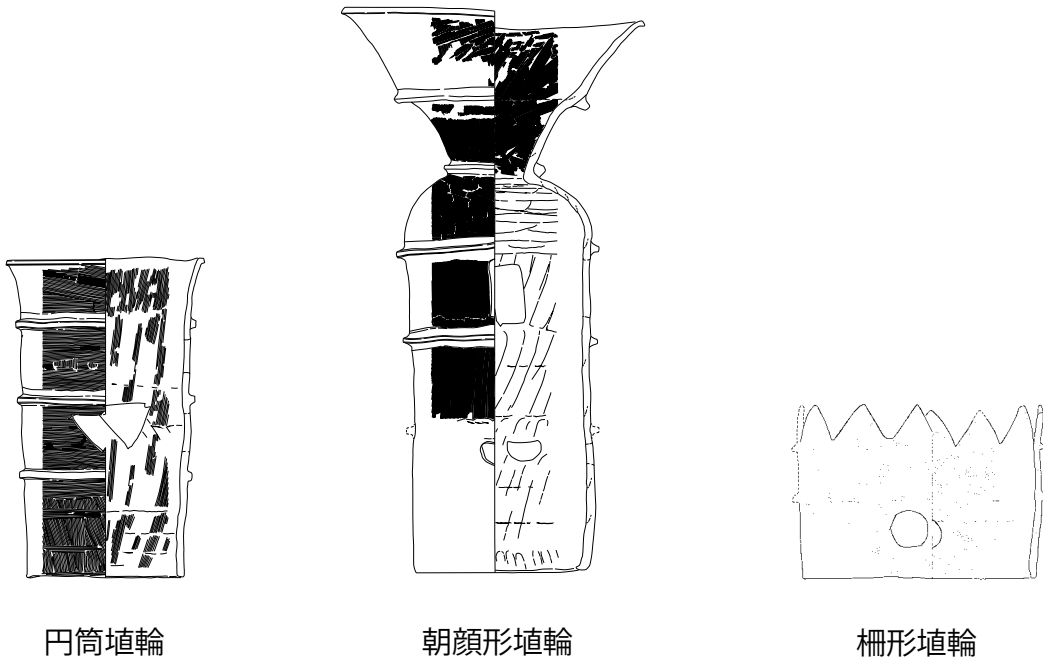
現在調査中で全容はまだみえていません。後円部第1段テラスと前方部第2段テラスが接続する部分の構造が判明するものと考えています。

まとめ

後円部西側の調査では、古墳の裾から第2段テラスまでの状況が明らかとなり、昨年度の後円部東側の調査成果と合わせ、墳丘を復元するために必要なデータが揃いつつあります。また今回、特に重要となるのが、くびれ部の実態です。同時期の古墳では後円部と前方部のテラスがスムーズに接続する例が主流です。それはテラスが前方後円墳の形に続くイメージですが、トレンチ 18 の調査内容を考慮すると、金蔵山古墳の場合は違った特徴をもつ例の一つとして挙げるすることができます。今後、出土埴輪の検討に加え、畿内中枢部の王陵を含めた他古墳の例との比較を行い墳丘構造にみるつながりを検討していくことも肝要となります。



各段テラスの構造



埴輪列中の各種埴輪